

どれを読んでもおもしろそう？！

## よりみちパン！セ シリーズ こんなのはいかが？

### 『建築バカボン』 岡村泰之／著 理論社 2008

建築家や建築って自分の生活からは縁遠いと思いがち。しかし、この本を読むと建築って実は身近で、奥が深いことが分かる。建築家の岡村さん(著者)の語る「建築」はまるで「人生」ともいえる。まっさらな土地に建てる家を考えることは、見えない未来をイメージすることに似ているという。建築家や工務店にお願いして終わり！ではなく、自分にとって大切なことを洗い出し、建築家や工務店と一緒に試行錯誤しながら家を建てる。その期間は数か月では足りないことも。岡村さんが18歳まで過ごした家の間取りには驚かされるほか、かわいい絵や写真が豊富で楽しい。自分の家を建てる予定は無くても、一読の価値あり。

### 『神さまがくれた漢字たち』 山本史也／著 理論社 2004

皆さんが普段使っている漢字の成り立ちについて、どれほどご存じだろうか。この本は、ほぼ3300年生きてきた文字、「漢字」の物語を丁寧に紹介している。不朽の聖典として尊ばれてきた説文解字(せつもんかいじ)は、許慎(きょしん)が、主に篆書(てんしよ)の字体を基準として漢字の成り立ちを探索したもの。その「説文解字」を圧倒する文字学として傍らにそびえ立つ新しい体系が説明されている。少し難しい内容もあるが、漢字をめぐる「物語」を次代の人々に伝えてほしいという著者たちの気持ちが熱く伝わってくるので、読み進まずにはられない。すべての漢字にルビ付。

ブックデザインを祖父江慎氏が担当。

10代に読んでほしい気持ちが伝わってくる。不思議な、かわいい、キラキラ☆感満載の装丁だけでも楽しめる。うっかり手に取ってしまうユニークな装丁の本も。

### 『ハッピーになれる算数』 新井紀子／著 理論社 2005

算数なんて大嫌い！という人も少なからずいるはず。著者も「数学がみなさんを苦しめるテストのためだけに存在するなら崩壊しちゃえばいいかもしれないですね」と言う。そして、「でも、ほんとうにそうかな？(数学が崩壊したら)ビルはまっすぐ立つのかしら？安全に信号機は動くのかしら？」と続く。

著者いわく、算数や数学を通じてみなさんは「仕組み」とは何かを学ぶ。算数や数学を通じて学んだ「仕組み」は学校や経済など他の「仕組み」にもつながる。大学の法学部を卒業したちょっと異色の著者によると「数学ができるようになるかどうかは、あたりまえのことをバカにせず、省略せずに、順番に書く練習ができるかどうか」にかかっているそうです。同著者の『生き抜くための数学入門』もぜひ！

### 『さびしさの授業』 伏見憲明／著 理論社 2004

著者は、小学校6年生の時にクラスの友達から無視された経験がある。自分と世界との間に生じた亀裂はざっくりと傷口を開けたまま、未だにヒリヒリとするという。「私」がいなくても世界は回っていく、しかし悲しいことに「私」はそうした世界の中でしか生きられない事実気づく。「私」をいかにして世界の中に位置づけ、「生きられる場」を探し出すか…。映画「シックスセンス」や「X-メン」シリーズ、「千と千尋の神隠し」のほか、小説『赤毛のアン』の登場人物を挙げて、生き方を探る一冊。

## 『ザ・ママの研究』 信田さよ子／著 理論社 2010

臨床心理士として、カウンセリングをする著者は、10代だけでなく40代、50代の女性たちの「ママ」に関する悩みを聞いてきた。著者がこの本で提案するのは、「ママ」を対象化し、研究してみること。好奇心を持って研究するのは、ひとりの人間であり女性であるママを知り、ずっと好きでいるため。「ママ」との付き合い方に困っている人もいない人も、ママへの理解が深まる1冊。

## 『世界のシェー！！ フジオプロ公認』 平沼正弘／著 理論社 2010

「シェー」とは、1960年代に「少年サンデー」に連載されていた漫画「おそ松くん」の登場人物「イヤミ」が驚くときにとるポーズ。この有名なポーズを世界中の人々にまねてもらい、写真撮影した著者は、それを一冊の本にまとめた。「イヤミ」を知らぬであろう世界中の人々が決める「シェー」のポーズは、何やら似て非なるものもあるが、面白い。「イヤミ」や「シェー」を知らなくても楽しめる。

巻末に掲載されている、「谷川俊太郎さんからの四つの質問」

- 何がいちばん大切ですか？
- 誰がいちばん好きですか？
- 何がいちばんいやですか？
- 死んだらどこへ行きますか？

同じ質問に答える著者たち。あなたならどんなふうにこたえるだろうか？

彼らの答えを読むだけでも、その本を書いた人の考え方や世界観が伝わってくるのでオススメ。

## 『カレーになりたい！』 水野仁輔／著 理論社 2008

静岡県出身の著者は中学生の時からカレー屋へ通っていた。東京の大学に進学した後は、通いなれたカレー屋に匹敵する店を探し求めて食べ歩くほか、自分でおいしいカレーを作れるようになろう！と決心する。カレー屋でアルバイトをしたり、まだ見ぬ味を求めてインドへ旅に出たり、カレーに関する書籍や音楽を収集したり、そのカレーへの愛には驚かされる。毎日1食以上、年間500種類以上のカレーを食べている著者の体は、すでにカレーでできていると言えるかもしれない。ついには、「カレー」という三文字が入っていれば反応するようになり、「エスカレーター」という表記にドキッとさせる著者。カレーがきっかけで、素晴らしい出会いがあったり、カレー仲間ができたり、人との触れ合いも描かれている。

## 『「美しい」ってなんだろう？ 美術のすすめ』 森村泰昌／著 理論社 2007

自称「美術家」の森村泰昌さんが「美しさ」についてまとめた1冊。美術館にあるような絵や写真、彫刻などの話から自身の作品の説明まで幅広く扱っている。ブレイクタイムでは、読者からの美術や美しさに関する質問に答えている。「美術とは、見える世界を通じて見えない世界にいたること」とか「なにかを美しいと感動できるころを持ったひとは美しい」など「美しい」について考えるきっかけとなる言葉がちりばめられている。

## 『バカなおとなにならない脳』 養老孟司／著 理論社 2005

この本は、理論社のホームページに子どもたちから寄せられた質問・相談に養老孟司さんが答えた回答集。その質問や相談は多岐にわたり、「早く寝ないとバカになる？」とか、「おとなと子ども、男女の脳のちがいは？」「家族に、虫をすきになってほしいんです」「なぜ、夢を見るんですか？」などなど…。養老さんは、怒ったり笑ったりしながら丁寧に答えて(応えて)いる。子どもだけでなく、同じような質問を受けるであろう大人たちにもぜひオススメしたい一冊。